

鯨の食文化考

村田 勝敬

2年くらい前のこと、テレビで日本の太平洋岸の砂浜に鯨が打ち上げられている光景を見た。水族館員は「群れの一部が餌の魚を追っているうちに迷い込んだか、寄生虫により方向感覚を失ったのでないか？」と述べていた。一方で、魚多食による高濃度メチル水銀曝露の結果として、鯨が脳神経障害を起こしたのではないかと危惧した研究者もいる。この結論を出すには、鯨の脳組織中の水銀濃度の測定結果を待たねばならないだろう。



フェロー諸島でのクジラ料理

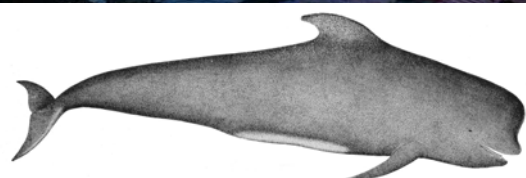
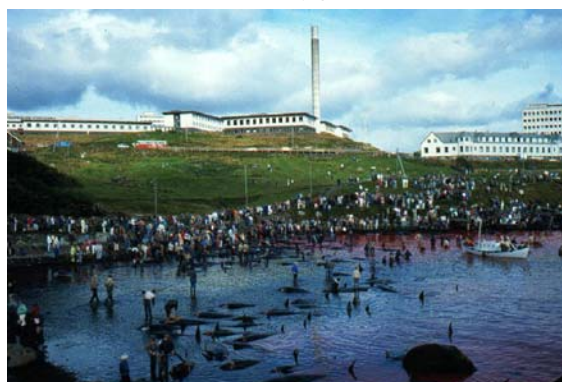
小学生時代の学校給食には、鯨肉の竜田揚げが度々出ていた。大学生時代には値段も手頃な「鯨刺し」を寮近くの学生酒場でよく食べた。解凍直後の鯨肉は生姜醤油に好く合い、シャリ感があって本当に美味しいと思っていた。その後1986年の商業捕鯨禁止も手伝って、約15年近く鯨のことは脳裏から離れていた。1993年4月にフェロー諸島に初めて出かけて、再び鯨肉と遭遇した。「我々は鯨肉を持っている。日本人が食べるという刺身をこれで作ってくれ」と島のウェイエ医師に依頼され、断ることもできず包丁を握った。フェロー諸島の住民は、通常茹でた鯨肉および脂身にマスタードを塗って食べ、私も昼食時に何度か経験した。そして、「島の住民はこの鯨を食べてメチル水銀の曝露を受けている・・・」と考えながら、毎日7歳前後の子供の神経生理学的検査を続けた。

「フェロー諸島」(デンマーク自治領、人口約47,000人)は、メチル水銀やポリ塩化ビフェニル(PCB)を巡る話題に転じると、環境科学の世界で知らない者がいないくらい有名になった。すなわち、ここで1986-87年に生まれた7歳児960名において、妊娠中の母親から胎盤経由で曝露したメチル水銀による神経行動・生理機能への影響が観察されたのである。ともあれ、日本からフェロー諸島まで行くとすれば最短で約14時間要する。デンマークのコペンハーゲンからフェロー諸島へは飛行機で約2時間であるが、両者の間には1時間の時差があり、地理学的にもデンマークの一部とは思えない素朴な自然がある。フェロー諸島は西欧諸国の中で独自の食文化および言語を持つがゆえに、メチル水銀やPCBの研究対象の地として選ばれたのである。私は、胎児性メチル水銀曝露による小児神経発達影響に関する共同研究のため、そこで合計1年近く生活した。

デンマークとアイスランドを結ぶ線上の北緯62度に位置するフェロー諸島は北大西洋の海底火山帯の一部が海面に姿を現したもので、島全体が溶岩でできている火山帯特有の地勢である。島の多くに古い溶岩流の痕とともに、氷河で削られたフィヨルド地形が見られる。また、フェロー諸島は近海をメキシコ湾流が通るために、緯度の割に気候は温和で、海岸では冬氷点下5℃に達することは少ない(冬の平均気温は3℃)。その上、北の海の特徴とも言えるが、天候の変化が激しく、一日のうちで雪が降ったかと思うと晴れたり、そのまた後には雨が降ったりと著しく変わり、1年の3分の2は雨、霧、雪である。

北大西洋を回遊しているゴンドウ鯨は“齒鯨”に属し、海洋生物の中で食物連鎖の頂点に立つ。鯨は「超音波を発し、岩壁からの反射波を感知する」と考えられていることから、フェロー住民は鯨が島の近海に現れると砂浜のある海岸まで船で追い込み、そこで捕獲す

る。フェロー諸島の捕鯨は古くより行われ今日に至っているが、捕獲された鯨は売買されることなく住民全員で分け合うことから、日本やノルウェーにおける商業捕鯨と区別される。1990年代前半のフェロー諸島で捕れるゴンドウ鯨に含まれる平均水銀濃度は $3.3 \mu\text{g/g}$ 、鱈で $0.07 \mu\text{g/g}$ であった。当時の成人の平均的な鯨肉摂食量は 12 g/日 、魚肉は 72 g/日 であり、水銀摂取量は約 $36 \mu\text{g/日}$ と推定された。



ゴンドウクジラ

1998年にフェロー諸島公衆衛生部より鯨肉摂食制限が出され、伝統的な食文化が変わろうとしている。すなわち、「鯨肉は水銀含有量が高くかつフェロー住民の主たる水銀曝露源であることから、①鯨肉を月2回以上摂食しない、②3ヶ月以内に妊娠を予定している女性や現在妊娠中あるいは授乳中の女性は鯨肉を食べない、また鯨の脂身には高濃度のPCBが含まれるので、③成人でも脂身の摂食は月に最大2回までに抑える、④潜在的なPCBの有害影響に胎児が晒されないため、女性は出産を終えるまで鯨の脂身を食べない、⑤鯨の肝および腎臓は全く食べない」よう勧告した。この結果、フェロー諸島における毛髪水銀濃度が $10 \mu\text{g/g}$ 以上の母親の割合は1986-87年に13%、1994年に10%、1998-99年に3%と減少した。まさに、フェロー諸島で行われた疫学研究は単なる調査から予防医学活動への橋渡しとなったのである。

2000年の調査が終わりフェロー諸島を去

る時のことである。出発前の空港ロビーで、一人の日本人と出会った。最初、お互い「日本人だろうか？」と疑いながら沈黙していた。しばらくして、彼のハーフコートの腕に縫いつけてある“Kato”という文字に気付いた。その瞬間、視線が逢って、お互い頭を下げてしまった。3ヶ月の滞在中、日本人に誰一人会うこともなかったので、安堵感から彼と話し込んでしまった。ロシア船内で日本に送る魚の買い付け交渉を終え、フェロー諸島で下船しロンドン支店に戻るところだと言う。鯨を食べているフェロー住民の水銀曝露影響の調査で滞在していたことを話すと、彼は数奇な人生について語ってくれた。若い頃捕鯨船に乗って南氷洋に出かけたが、商業捕鯨禁止を受けてマグロ漁船に移った。その後マグロ船団も縮小・廃船の波を受け、結果として現在の仕事に就いたという。最近は漁業資源も枯渇気味で、売り手市場だそう。商業捕鯨の禁止によって急増した鯨の鯨飲馬食がその理由であると聞いて一層驚いた。一方、地球温暖化による砂漠の拡大に伴い牧草地は縮小傾向にあり、家畜の増産にも限界があろう。別れ際のコペンハーゲン空港で、「3～4年も経てば商業捕鯨が始まるかも知れないよ」と彼は言い放った。ウェイエ医師の家で鯨の刺身を作り、皆で食べた時の記憶が蘇ってきた。商業捕鯨はいまだ再開の気配もないが、北大西洋上の小島で鯨が取りもつ邂逅はあまりにも運命的なものに思えた。



「海外見聞録デンマーク領フェロー諸島」より一部改変
さいたまさんぽ第4号(2000年10月刊)